

石見活性化キャンペーン企画

明日へつなぐ

<31>

日差しを浴びて独特の深みのある輝きを放つ赤瓦。今年、創業205年目になる。

日本海に面し、ニシン漁と北前船の交易で栄えた北海道南西部の江差町に、石州瓦がなじんだ歴史ある建築物がある。

1880(明治13)年建立という西本願寺江差別院の庫裏。屋根一面を覆う石州瓦は1996年に一部を残して葺(ふ)き替えられるまで100年以上、この

北の大地で、持ち前の塩害、凍害への強さを発揮した。瓦を製造したのが今も、最高温度1350度の高温焼成と来待石の天然釉薬(ゆうやく)にこだわる亀谷窯業(浜田市長沢町)。

「日本一」といわれる高温の焼成温度で焼き締めた、水の浸透しにくい、凍結に強い瓦。昔ながらの伝統技法を受け継ぐ同社専務、亀谷典生さん(40)が言う。

「長く使われてきたものは理由がある。歴史はまねのできない強みだ」

◆ ◆ ◆

江戸時代、浜田城築城のため大阪から招き寄せられた瓦師によって造られたのが最初とされる石見の瓦。石州瓦はその後、陶器の石見焼を手掛ける職人により、釉薬瓦として誕生したという。

第6部 石州瓦 ②

国内流通



昔ながらの瓦造りを受け継ぐ亀谷典生さん。高温焼成で焼き締めた赤瓦の強さは歴史が実証している＝浜田市長沢町、亀谷窯業

明治まで北前船で全国へ

江戸期から明治中期まで、大阪から瀬戸内、日本海経由で国内物流を担った回船・北前船で、北陸、東北、北海道へ。

北前船による流通を調べ、全国的な普及に目を見張るうちに、浜田高校(同市黒川町)の阿部志朗教諭(46)は、石州瓦と、その元前、浜田水産高(同市瀬戸ヶ島町)赴任を機に「何か、となったとされる石見焼の

を巡り歩く中、九州で、本場・石見の職人が直接伝えられたものもある、と知った。海岸から運ぶと運賃が高くなる山間部には、職人が出掛け、造った、という。韓国・鬱陵島では明治、大正期に江津市内にあった窯で焼かれた、窯印のある瓦を見つけた。

この地域の宝」を生徒たちに伝えようと、まず関心を持ったのが北前船だった。北海道から九州、韓国まで、夏休みなどを使って自ら足を運んだ先々で、石見焼や石州瓦と出合った。

「北海道的にもある。すごい。地理の授業を時々脱線しながら阿部教諭は「石見の宝」を胸を張って語り伝える。

「産地の焼き物が、(産地の)石見地方が、近代から現代まで日本の暮らしを支

は、建築様式の多様化に新たな商品で応えながらも「代々受け継がれてきた軸は変えない」と言い切る。

クリック

石州瓦の市場 江戸時代以降、寒さの厳しい日本海沿岸を中心に普及。石州瓦工業組合によると、近年、海外輸出が始まる中、2009年の販売エリアと販売枚数に対する国内シェアは、中国地方52.9%、九州地方34.8%、近畿地方6.9%、四国地方3.6%など。都道府県別では、福岡16.2%、島根15.0%、広島14.7%など。

一枚一枚手で仕上げる、品質にこだわった「百年瓦」。塩害、凍結に耐え、重ねてきた歴史が実証する赤瓦の輝きは、時代を超えていく。(毎週月曜日掲載)